

◀ホームレス歌人◀のいた冬

横浜・寿町にその足跡を求めて⑧

ジャーナリスト

三山 喬

作中の「ブラジル人」を探して

今回はまず、「探索」の結果をひとつ報告する。ブラジル人ホームレスのことだ。

一連の作品で、公田氏はたつたひとりと、自分以外の野宿者を詠んでいる。「日産をリストラになり流れ来たるブラジル人」だ。最初の情報は「タケちゃん」と呼ばれる生活館の常連から聞かされた。

「知り合いつてわけじゃないけどね

なようなことを確か言ってたよ」

リーマンショック後の派遣切りは二〇〇八年秋、日本人労働者に先駆け、まず東海地方で働く日系ブラジル人の間で顕在化した。直後の年末と年始、私は彼らが集中する静岡県浜松市で取材している。

実際、現地には大量の失業者がいた。しかしこの時点ではまだ、失業保険を受け取れる人が多く、路頭に迷う状態には至っていない。より多くが契約期限を迎える年度末以降、問題は深刻化する、と言われていた。

その後、日本政府は出稼ぎ日系人に対し、再入国を一定期間制限する条件で、希望者に帰国費を支給する制度を始めた。「タケちゃん」と同宿だったブラジル人も、最後にはそれを利用したのだろう。

日本語も不自由なブラジル人がな

同じドヤにいたんだよ。日本語が変なんで、『お前、ナニ人だ?』って聞いたら『ブラジル人です』って。

若かったよ。二十五歳くらいかな。顔はまるつきり日本人。名前も日本の名前だったけど、何ていったかなあ」

彼によれば、この日系ブラジル人が同じドヤに来たのは、昨年(二〇〇九年)の年明けだという。それ以前に、日産か下請けの自動車工場で働いていた。そんな話はしなかっただろうか。

「聞いてない。ドヤには生活保護で

ぜひとり、横浜のような不慣れな土地に流れ着いたのか。浜松などの巨大コミュニティが同胞の失業者だらけになってしまい、思い切って「外の世界」に飛び出してみたのかもしれない。

しかし、派遣切りからほんの一、二ヵ月後に横浜の路上にいたとすれば、随分先走った行動だし、横浜に来たのが翌冬なら、公田作品のブラジル人とは別人になる。いったいどちらだったのか。判断を下すには、材料が不足していた。

公田氏の「感情」の追体験を

しばらくして私は、もうひとつ別の情報を得た。

自立支援施設「はまかせ」の入所者に一時期、ブラジル人がいたというのである。

入ったんでしょ。仕事を探してるって言うってたけど、仕事なんかいないだから、ブラジルに帰れって言うてやったんだ。あんな片言しかしゃべれないんじゃない、仕事なんか見つかりっこない。そしたら八月か九月ごろ、ホントにブラジルに帰ったよ」

私はなぜ、ブラジル人を探すのか、取材の概要を説明した。

「前の前の冬? だったら奴は違うと思うよ。去年(二〇〇九年)の暮れにハローワークに行つて、生活保護を紹介されたんじゃないかな。そんな

「いまはもう、いませんが、確かにひとりいましたね」

工藤廣雄・施設長は、記録を紐解いて肯いた。三十七歳の日系ブラジル人。はまかせには〇八年以来、飛び飛びに計四回入所している。最後が昨年の春だった。

「その後、厚生施設に移って生活保護になりましたが、結局、解体業の仕事を得て、そこも出て行ったみたいですね」

男性は毎回、はまかせに入る直前には、路上生活を送っていた。職を見つけて施設を出るものの、また失業して路上に舞い戻る。すぐ解雇されるのか、自分から辞めてしまうのか。いずれにせよ、過去三年はその繰り返しである。

しかし、彼が最初にはまかせに入ったのは、リーマンショック前の六月。ブラジル人社会に派遣切りの嵐